

出世本懐ノート

山上正尊案

2023/02/01-02 峠雪安居 安芸最禪寺

2023/04/18 論題を味わう勉強会 本願寺名古屋別院

過去の判決2

昭和2年度 出世本懐 判決 2

平成9年度 安居 出世本懐 3

2007 平成19年度 安居 6

2023 令和5年度 安居提要 9

〈出拠11

〈釈名11

Q 字義如何11

Q 仏教での釈名如何12

〈義相13

一、『大経 発起序の文意13

阿難の請問 13

如来問いを審らかにする 阿難の実答 15

如来が嘆じ許す 15

二、元祖義19

三 宗祖義 『大経 が真実教である理由① 五徳瑞現22

四 宗祖義 『大経 が真実教である理由② 真実の利28

光闡道教 28

五 存覚上人『六要鈔』『決智抄]31

六 『観経 と』弥陀経34

宗祖 「教文類 頌讚 34

宗祖 「化身土文類 観経 34

宗祖 「化身土文類 小経隠顯『聖典全書 二巻 199 頁 35

良忠 鎮西第3祖『観経玄義分伝通記 第五 (J02_0178B19) 35

(参考 『法華経37

(参考 『華嚴経40

佛說無量壽經

爾時世尊。諸根悅豫。姿色清淨。光顏巍巍。尊者阿難。承佛聖旨。卽從座起。偏袒右肩。長跏合掌。而白佛言。今日世尊。諸根悅豫。姿色清淨。光顏巍巍。如明淨鏡。影暢表裏。威容顯曜。超絕無量。未曾瞻覩。殊妙如今。唯然大聖。我心念言。今日世尊。住奇特法。今日世雄。住佛所住。今日世眼。住導師行。今日世英。住最勝道。今日天尊。行如來德。去來現佛。佛佛相念。得無今佛。念諸佛耶。何故威神。光光乃爾。於是世尊。告阿難曰。云何阿難。諸天教汝來問佛耶。自以慧見。問威顏乎。阿難白佛。無有諸天。來教我者。自以所見。問斯義耳。佛言善哉。阿難。所問甚快。發深智慧。真妙辯才。愍念衆生。問斯慧義。如來以無蓋大悲。矜哀三界。所以出興於世。光闡道教。欲拯群萌。惠以真實之利。無量億劫。難值難見。猶靈瑞華。時時乃出。今所問者。多所饒益。開化一切。諸天人民。阿難當知。如來正覺。其智難量。多所導御。慧見無礙。無能過絕。以一食之力。能住壽命。億百千劫。無數無量。復過於此。諸根悅豫。不以毀損。姿色不變。光顏無異。所以者何。如來定慧。究暢無極。於一切法。而得自在。阿難諦聽。今爲汝說。對曰唯然。願樂欲聞。

過去の判決

昭和42年度 出世本懐 判決

一

宗祖は大無量寿経を真実教と指定され、その大無量寿経に基いて浄土真宗の法義を組織大成されたのである。故に浄土真宗の法義の根底に、大無量寿経こそ真実教であり、釈尊だけでなく三世諸仏の出世の正本意の開顕されている經典であるという信念があるのである。このことは本典の教巻を初めとして、宗祖の聖教の到るところに明らかにされているのである。また宗祖の教判である二双四重の教判や、真化儀の教判も帰する所は、浄土真宗のみが真実に弥陀の本願の開顕された法義であり、三世諸仏の出世の正本意であり、真の一乘法であり、凡夫が速疾に成仏できる法義であることを明らかにされたものである。従って宗祖の出世本懐論の歴史的背景には、天台宗の出世本懐論が当然考えられるが、しかし単に法華経に対して大無量寿経を出世本懐の經典として主張されたのではなくて、聖道教全体に対して、八万四千の法門全体を方便として、本願一乗円融無碍真実功德大宝海に入らしめるという立場である。故に出世本懐の文証は大無量寿経の発起序の「如来以無蓋大悲矜哀三界所以出興於世、光闡道教欲拯群萌惠以真実之利」の文に依られていることは明らかであるが、この文は宗祖所覧の唐訳にもまた梵本にも無いのであるから、理証をより基本的に考慮に入れることを忘れてはならない。それは縁起説を正覚内容とされる釈尊の仏教、仏陀を自覚々他覚行窮満とする仏教、般若より方便への展開を必然的なものとする大乘仏教、弥陀の願力により五乗齊入を立場とする浄土門、その最も具体的に説かれてるのが極悪最下の凡夫を速疾に成仏せしめる法としての誓願一仏乗であって、出世本懐の法はこれを外にしてあり得ないのである。宗祖が本典の一乗海釈に華嚴経と涅槃経を引用されているのは、一代の始終の經典を引いて、一代仏教の結論を明らかにされたと見られるであろう。

二

存覚上人の出世本懐説は当時盛んであった日蓮宗の出世本懐説に対応されたもので、専ら法華経に対しての立論であるが、しかし、その根底に弥陀の本願こそ真実の一乘法で、極重の悪人が速疾に無上の涅槃を得る唯一の法であることを、強く主張される宗祖の立場を継承していられることは明らかである。故に教の権実に約した時は法華経出世本懐の経と一応は与えていても、機の利鈍に約した時は、出世本懐は大経に奪って、弥陀の本願こそ障重根鈍の常没の衆生を済度することを明らかにされたのである。

存覚上人の出世本懐で注意すべき点は、法華と念仏が一法の異名であると言われている点で、この意は宗祖の聖教には見えないことである。これは方便品に法華経の使命は、衆生に仏知見を開らかしめて清浄涅槃を得しめるためであり、その仏知見とは第一希有難解の法であり、諸法実相であるといっているのと、大経に名号を聞信することを明信仏智といい、それが極難信の法といわれ、また論註の八番問答には名号を実相法と表現している点から理解すべきであろう。

三

宗祖が聖道門の法を権仮とされた意はどのように理解するのが良いか。聖道門は成仏法か、または不成仏法なのか。先哲の用いられた語を借るならば、約機廃立なのか、或いは約法廃立の意があるのか。自力法と他力法は相対的なものか、質的に異なるものか。聖教量としては約機廃立の文が多いが、これは主体を忘れた理論、実践を離れた論理の追求でないことを示すものであって、約法廃立を認めないということではないのであろう。それは聖道自力法は従因至果の法門であり、弥陀他力法は従果降因の法蔵菩薩の願心によって修顕された法門と判定された祖意を窺うと、自力法と他力法の相違が相対的なものでなくて、質的な相違と理解しなくてはならないからである。しかしそれも主体を忘れた理論ではなく、飽くまで自己の成仏法という立場で論じられているといえ、約機廃立を無視した約法廃立でないともいえるであろう。

四

従来の出世本懐論はすべての經典は釈尊一代の説法であるという前提に立って論じてきたのであるが、しかし現代では歴史的研究を認めるかぎり、現存のすべての經典を釈尊一代の説法とすることは再考を要する問題である。従って出世本懐論も現代では大無量寿經の法義が、すなわち浄土真宗に説く他力廻向の法義が、縁起説を正覚内容とされる釈尊の仏教の最も正しい必然的な展開であることを、教理史的に明らかにすることでなければならぬ。また一部の偏見者が『無量義經』の「四十余年未顕真実」の語と五時の教判とを固執して、法華經の出世本懐を主張するのに対しては、釈尊が正覚の内容の真意を四十余年も語られなかったということは、根本仏教の研究からは問題にならないことであり、また釈尊を真の宗教家として見る場合は、自己の信念を四十余年も語らない宗教家は考えることも出来ない。全く取るに足らぬ妄説であることを明らかにすべきである。

以上

平成9年度 安居 出世本懐

総理…武邑尚邦 勸学

本講師…秀野大衍 勸学

講題…『顕浄土眞實教文類』

典議…山田行雄 司教

会説論題提要

三、出世本懐

(題意)

釈尊の出世の本懐は弥陀の本願を説くことにあることを論定し、その意義を明らかにする。

(出拠)

『教文類』

『大經』序分

『正信偈』

『尊號眞像銘文』

〔釈名〕

〔義相〕

- ① 釈尊の出世本懐の論定
- ② 出世本懐の意義について
- ③ 出世本懐と教判
- ④ 出世本懐と經典成立

「出世本懐」判決

〔題意〕

釈尊の出世の本懐は弥陀如来の本願を説くことにあることを論定して、その意義を明らかにする。

〔出拠〕

『大經』

如来以無蓋大悲矜哀三界。所以出興於世、光闡道教、欲拯群萌惠以真実之利。

(真聖全一の四)

〔教卷〕

夫顕真実教者、則『大無量寿經』是也。斯經大意者、弥陀超発於誓、広開法蔵、致哀凡小選施功德之宝。釈迦出興於世、光闡道教、欲拯群萌惠以真実之利。是以、説如来本願為す經宗致、即以仏名号為経体也。何以得知出世大事。

『大無量寿經』言。(中略)十方称讃之誠言、時機純熟之真教也。応知。

(真聖全二の二～四)

〔正信偈〕

如来所以興出世 唯説弥陀本願海

(真聖全二の四三～四四)

この他、聖教には出世本懐に関する文は多くある。

例えば、『浄土文類聚鈔』・『愚禿鈔』・『浄土和讃』・『高僧和讃』・『尊号真像銘文』・『一念多念文意』・『口伝鈔』・『六要鈔』・『決智鈔』・『法華問答』等である。

〔釈名〕

出世とは、出現世間の意で、仏が迷いの世界に衆生摂化のために現れること。

本懐とは、本とは末に対する語であり、根本、本末ということ。懐とはいなく、こころざし、意志の意である。

合釈すれば、仏が迷いの世界に出現されて、衆生を救済のために説法される根本意志である。

〔義相〕

(一)

宗祖における出世本懐論を窺うに、『教行信証』の「教卷」の全体が、まさに釈尊の出世本懐論の展開であると見ることができる。

「教巻」において宗祖は、先ず『大無量寿経』こそが真実の教であると決定される。そして、その『大経』こそが釈尊の出世本懐の教であることを論証されるのである。その論証に、二義を出す。(一)には、仏自身の言説によって論定する。(二)には『大経』説時の釈尊の威儀をもって証明するのである。

先ず、仏自身の言説する論定とは「教巻」に「釈迦出興於世、光闡道教、欲拯群萌恵以真実之利」(真聖全二の二)とある。この文は、『大経』の出世本懐の文、「如来以無蓋大悲矜哀三界。所以出興於世、光闡道教、欲拯群萌恵以真実之利。」(真聖全一の四)に依るのである。これは、『大経』こそが釈尊出世の本懐であることを、經典それ自身で語らしめるためである。いまここに「如来」とあるのは、『大経』と説かれた時の釈尊は融本の弥陀であることを示すものである。「光闡道教」の道教とは、聖道の法である。釈尊の本意は「光闡道教」にあるのではなく、「欲」(おぼす)の文字の下にある「欲拯群萌恵以真実之利」にあることに注意せねばならぬ。

次に、『大経』をもって出世本懐とする理由に、『大経』説時の釈尊の威儀をもってする。この立場は五徳瑞現の文に依る。五徳瑞現の一々に「今日」とあるのは、釈尊が『大経』を説かれた「その時」を指す。五徳瑞現は、『如来会』に依れば「世尊、今者入大寂定行如来行」(真聖全一の一八六)とある。即ち、釈尊が弥陀三昧において弥陀の徳と融合して(入大寂定)阿弥陀仏の教えを説きたもう(行如来行)ことに収まり、『大経』をもって出世本懐とする意を窺うのである。

しかるに、弥陀法を説くのは、独り釈尊のみの出世本懐ではなく、十方諸仏の出世も、またこの一点にありとするのが、「正信偈」の「如来所以興出世 唯説弥陀本願海」である。

(一)

次に出世本懐を教判の立場から論考せねばならぬ。この問題を最も端的に示すのが、『六要鈔』に「論其出世本懐之義、略有二意。一約教権実、三乘是権、一乘是実。故以一乗説為本懐。(中略)二約機利鈍」(真聖全二の二二二)とある文である。即ち、教の権実、機の利鈍という義である。ここでいう教の権実の判釈は、聖道門の中の三乗と一乗との対比であって、浄土教は含まない。機の利鈍という場合は、聖道門の一乗教と浄土教の本願一乘法との対比において、聖道一乗の教は利根の者の教えであるが、弥陀の本願一乘法は、衆生の利鈍は問題とせず、十方衆生がその救済の対象であるとするのである。

これを宗祖の教判で示せば、二双四重判より一乗海釈・門余の釈と展開する。「化身土巻」には、「言門余者、門者即八万四千偈門也、余者則本願一乘海也」(真聖全二の一五四)と、釈尊出世の本懐が弥陀法を如実に説く『大経』をもってすることを明らかにされるのである。

最後に、出世本懐論の基本は、經典は全て釈尊の説法の文字化であることを前提として論じられるものであった。ところが、經典成立史等の学問の進化によって明らかにされてきた經典成立の諸問題をも、論義の射程に入らなければならぬ新たな問題が今後にあることに注意したい。

以上

2007 平成19年度 安居

綜 理	北畠 典生 勸学	
本講師	梯 実圓 勸学	講題…『顕浄土方便化身土文類』
副講師	太田 利生 司教	講題…『仏説無量寿経』
副講師	武田 宏道 司教	講題…『俱舍論破我品』
典 議	林 智康 司教	

安居会読論題提要

二、出世本懐

〔題意〕

弥陀の本願を説くということが釈尊出世の本懐であることを明らかにする。

〔出拠〕

『大経』序分、「教文類」、「正信偈」、「尊号真像銘文」

〔釈名〕

〔出世〕「本懐」

〔義相〕

- ① 『大経』発起序の文意
- ② 『六要鈔』の出世本懐論
- ③ 出世本懐の所顕

〔出世本懐〕判決

【題意】

「教文類」等に『大経』の出世本懐を論じられた祖意を明らかにする論題である。

【出拠】

『大経』の発起序（『真聖全』一一四頁）の

如来、無蓋の大悲をもつて三界を矜哀したまふ。世に興するゆゑは、道教を光闡して群萌を拯ひ、恵むに真実の利をもつてせんと欲してなり。

という経文を親鸞聖人が「教文類」『真聖全』二二二頁）に出世の大事（本懐）を顕わされた言葉であるといわれたのが出世本懐論の根本出拠である。その他多くの文を挙げることができるが略する。

【釈名】

出世本懐の「出」というのは「出現」であり、「世」は世間のことで、今は迷いの境界である三界をさす。如来が、大悲を発して三界に出現されることをいう。

本懐の「本」とは「根本」の義、「懐」は「心に思うこと」「意趣」の意味で、根本意趣、本意のことである。つまり、釈尊のみならず三世の諸仏が、迷いの境界に出現される本懐・本意をいう。『大経』を説いて、誓願一仏乗を顕示する為であるということを「出世本懐」という。

【義相】

一、『大経』を出世本懐経と見る文証

①「恵以真実之利」の意味

先ず、『大経』を出世本懐経とする文証は、「教文類」等に示されているように、「発起序」の文である。『大経』を説こうとされた釈尊は五徳の瑞相を示現し、その所以を尋ねた阿難尊者に、「如来、無蓋の大悲をもつて三界を矜哀したまふ。世に興するゆゑは、道教を光闡して群萌を拯ひ、恵むに真実の利をもつてせんと欲してなり。」と答えられたお言葉によって『大経』が出世本懐の経であることを知ることができる。なお『尊号真像銘文』には、その如来を釈して「如来と申すは諸仏と申すなり」といわれているから、釈尊のみならず一切諸仏の出世の本意を開顕する經典と見られていたのである。

ところでこの経を説いて衆生に与えようとされているのは、「真実之利」であると言われているが、それを『尊号真像銘文』には「仏の世に出でたまふゆゑは、弥陀の御ちかひを説きてよろづの衆生をたすけすくはんとおぼしめすとしるべし」といい、弥陀の本願を指しているといわれている。それは、『大経』所説の法義の肝要を付属する付属流通分の教説と対望されたからである。そこには、

仏、弥勒に語りたまはく、「それかの仏の名号を聞くことを得て、歓喜踊躍して乃至一念せんことあらん。まさに知るべし、この人は大利を得とす。すなわちこれ無上の功徳を具足するなり。

といわれていた。すなわち衆生は第十七願成就の諸仏讃嘆の名号、すなわち『大経』の説法を聞いて、第十八願成就の名号を信受奉行し、往生即成仏の大利を得ると言われているのである。それは序分に、「真実之利」を恵むといわれているものと首尾照応しているとしなければならぬ。

その大利について、胎化段では、仏智不思議を疑って、諸行、もしくは自力念仏を行ずる疑心の善人は、胎生して「大利を失う」と誠め、仏智不思議の本願を信じて化生の利益を獲よと勧められていたものである。要するに「真実之利」とは、仏智不思議の本願を信受して獲る大利無上の功徳を指していたのである。こうして『大経』は、一切の衆生を平等に利益するために第十七願に乗じて本願の名号を説かれた経であって、釈迦、諸仏は、この経を説くことを出世の本懐とされていると親鸞聖人はいわれたのであった。

②光闡道教の意味

ところで『大経』の出世本懐の文の中に、「光闡道教」という言葉があるが、『尊号真像銘文』末(広銘文、『真聖全』二・六〇一頁)にも、『一念多念文意』にも、いずれも「光闡道教」を省略して「如来所為、興出於世、欲拯群萌、恵以真実之利」という文章にして出世本懐が論じられている。そこから見れば、「光闡道教」という言葉は、出世本懐の中には入らない言葉であるとみななければならない。そのことについて、『六要鈔』一(『真聖全』二・二二一頁)には、

「光闡」等とは、教法人を利するを名て道教と為す、理を証して物を益するを以て真実と為す。光は廣也、闡は暢也、恵は施也。諸師意今宗義に依に「道教」と言は、光く一代を指す、益五乗に亘る。「真実之利」とは、此の名号を指す。

と釈されている。まず光闡道教とは成仏道を説くことをいい、その教えを実践して自利利他することを真実之利というとする諸師の釈を挙げ、後に真宗の宗義による釈として、光闡道教は聖道一代の教法を指し、「真実之利」とは、本願名号の法門、すなわち『大経』の法門を指すといわれている。道教を聖道教とする理由については明らかにされていないが、親鸞聖人が、光闡道教を省略して出世本懐を論じておられる意を承けて釈願されたものにちがいない。

先哲は、さらにその祖意を探って「欲」の字のあり場所から見込まれている。もし「光闡道教」も出世本懐をあらわしているとすれば、諸仏の能欲を顕わす「欲」の文字が所欲を顕わす「光闡道教」の前に置かれていなければならない。しかるに経文は「欲拯群萌恵以真実之利」といわれている。これによって諸仏の所欲は光闡道教にはなくて、「拯群萌恵以真実之利」にあったといわねばならないといわれている。

なお先哲は『大経』には、「道教」の用例がこの他に三カ所(『真聖全』一・三頁、二八頁、三四頁)あり、経末には法滅の時に滅する「経道」という言葉もあるが、何れも「三乘法」をあらわす言葉として用いられているという指摘もある。ただし、阿弥陀仏の浄土での説法を道教といわれた場合は、三乗であっても三一融即しているから三乗のまが乗であるような教法で、穢土の隔歴不融の三乗とは違っているといわれている。いずれにせよ『大経』では道教を三乗教の意味で用いられているといわれている。

二、『大経』が出世本懐経と見る理証

第一に、釈尊を初め、十方の諸仏が『大経』を説かれるのは、第十七願に応ずるからである。諸仏は自力成仏の法門をさしおいて、阿弥陀仏の本願他力の法門に帰し、本願を讃嘆することを本意とされているのである。

第二に、『大経』上巻の最後に説かれた華光出仏の経意からいえば、十方諸仏は、浄土の蓮華のひかりが十方の世界にいたって、無数の仏陀となって、十方の衆生に仏道を説くといわれている。浄土から来現された諸仏の出世の本意が『大経』にあることはいうまでもない。

第三には、親鸞聖人は、「諸経和讃」に、釈尊を久遠実成の阿弥陀仏の応化身と判定されている。それは釈尊のみならず、三世にわたる一切の諸仏に通ずることであるから、諸仏は本仏弥陀の本願を説くことを本懐とされていることになる。この説は『口伝鈔』の開出三身章において極成されていく。

三、『六要鈔』の「教の権実」と「機の利鈍」

日蓮宗徒と対論して論破された存覚上人は、『六要鈔』一に、「教の権実」と「機の利鈍」に約して出世本懐を論じられている。「教の権実」の教とは教法のことであり、権実とは権仮方便教と真実教のことをいう。三乗は権、一乗は実という天台宗系の教判論によれば、一乗仏教を説くという『法華経』を出世本懐と見なして真実教とし、三乘法を説く爾前の諸教を権仮方便と判定し、非本懐と見ているのを挙げたものである。それゆえ「これ法華の意なり」といわれている。しかしこれは聖道門内の教判であって、聖道門外に独立している『大経』の法門とはかわりのないことであった。何故ならば『大経』の法門は機の利鈍に依って説かれている教であって、教の権実によって判すべきものではないか

らである。

「機の利鈍」の、利根とは、仏法に鋭敏に反応し、深い理解能力を持つものをいい、鈍根とは仏教について鈍感で浅薄な理解能力しか持たず、自力修行に適していないものをいう。ところで一切衆生の中には、利根のものは極めて少なく、鈍根無智のものは圧倒的に多く、従って権教であれ、実教であれ、自力聖道の法門で救われる機はきわめて少なかった。それゆえ阿弥陀仏は、平等の大悲に催されて、一切の衆生を平等に救って涅槃の浄土へ往生させ成仏させようと誓願し、鈍根無智の凡夫の救いに焦点を合わせて、本願力廻向の本願の名号を成就されたのであった。こうして自力聖道門に比べて、阿弥陀仏の本願他力に救われるものは圧倒的に多いことは明かである。

ところですべての如来のさとりの本質は自他一如の真如に契った悲智円満の心であるから、その本意は、善悪、賢愚の隔てなく、一切の衆生を平等に救って、涅槃の領域にいたらしめようという一点にあった。それゆえ阿弥陀仏の本願こそ一切諸仏の本意に契った法門であると言わねばならない。諸仏が第十七願に乗じて本願の名号を同心に咨嗟される所以である。それが一切の諸仏の本意に契った、出世本懐の法門だったからであると言うのが存覚上人の説であった。

こうして存覚上人は巧みに「教の権実」という与門と、「機の利鈍」という奪門という、与奪法門を建てて、『大経』の出世本懐論を確立して行かれたのであった。

【結論】

そもそも出世本懐の教であるということは、仏の随自意の教であるということを意味していた。仏の随自意の教を真実教と言ひ、随他意の教を方便教というのであるから、これによって『大経』が真実教であることが確定する。それゆえ「教文類」は、「しかればすなはち、これ真実の教を顕す明証なり」と引文を結ばれているのである

なお「化身土文類」には、『観経』と『小経』には隠顕があるが、その隠彰の実義から云えば、『観経』は釈迦微笑の素懷を彰わし、『小経』は無問自説という説教形式をもって、それぞれ『大経』と同じく本願他力の法義を説かれた出世本懐の教であり、真実教であるといわれている。

2023 令和5年度 安居提要

【題意】

如来の出世本懐は、ただ阿弥陀仏の本願を説くためであると明示された祖意を窺う。

【出拠】

「教文類」

『大無量寿経』発起序

「正信偈」

『尊号真像銘文』 他

【釈名】

「出世」「本懐」

【義相】

一、法然聖人の出世本懐論

(法然聖人の三経観を踏まえて)

二、「教文類」の所顕

『大無量寿経』発起序の所顕(五徳瑞現・出世本懐)

三、『六要鈔』説示の出世本懐論

資料提供 井上敬信さん

会読案

＜出拠＞

『大経』の発起序（『聖典全書』一卷19頁）（『註釈版』9頁）の
 如來、無蓋の大悲をもつて三界を矜哀したまふ。世に興するゆゑは、道教を
 光闡して群萌を拯ひ、恵むに真実の利をもつてせんと欲してなり。
 という経文を

親鸞聖人が「教文類」（『聖典全書』二卷二頁）（『註釈版』136頁）に
 出世の大事（本懐）を顕わされた言葉であるといわれたのが出世本懐論の根本出拠である。

＜釈名＞

Q 字義如何

A 『諸橋大漢和辞典』

① 出でる。いづ。

① 内から外へ行く。外へでる。（入の対）

㊦ すすむ。進

㊧ あらはれる。（出見也）。

㊨ ぬきんでる。すぐれる。特。

㊩ わきあがる。湧出

㊪ 上に向く。

㊫ うまれる。おひでる。生。

世 ① よ。三十年。代。

② よよ。よよにする。父子相つぐこと。

③ 人の一生涯。

④ 一王朝。一王室の統治期間。

⑤ とし。歳。

⑥ よのなか。人間。

⑦ 其の世。時代。時勢。

⑧ 世人。

⑨ うまれる。

⑩ 時に。その時その時に。

⑭ (仏)ものごとについての時間的区分。

即ち過去・現在・未来〔楞伽經四〕

① もと。

① ね。ねもと。根。

懐

【本懐】本来のねがひ。本望。本願。

① おもふ。おもひ。

㊀ おもひふける。念思。

㊁ おもひやる。おもひおこす。

㊂ おもひめぐらす。工夫する。

㊃ うれへる。いたむ。あはれむ。

㊄ ねがふ。

㊅ したふ。

② おもひ。なさけ。情。

③ ところ。むね。意中。胸臆。

Q 仏教での釈名如何

A (望月仏教大辞典)

「出世」

世に出現するの意。即ち諸仏が世間に出現して正覚を成じ、衆生を教化し度脱せしむるを云ふ。

『中阿含』第二十九八難經「仏衆祐と号す。世に出でて説法し、止息に趣向せしむ。」

『大智度論』第四「人寿八万歳に仏出世し、七六五四三二万歳の中に仏出世す。人寿百歳は是れ仏出世の時なり。」

「出世本懐」

釈尊の世に出現されたる素意

ちなみに

「出世間 (lokottara)」

「世間を超出する意」で「有漏の繫縛を出離する解脱の法」をさす。

「世間」

梵語路迦lokaの訳。毀壞すべきもの。毀壞すべき対治せらるべき有為有漏の現象をいふ。

梁訳『摂大乘論釈』第十五「世間の法は或いは自然に壞し、或いは対治壞に由る」

『俱舍論』第一「此の有漏法は亦有諍と名づけ、(中略)亦世間と名づく。毀壞すべきが故に、対治を有するが故なり。」

〈義相〉

一、『大経 発起序の文意』

阿難の請問

『無量寿経』

〔如来現相〕

（爾時世尊諸根悦予姿色
清浄光顔巍巍）

〔阿難請問〕

（尊者阿難承仏聖旨即從
座起偏袒右肩長跪合掌而
白仏言）

今日世尊諸根悦予姿色清
浄光顔巍巍如明浄鏡影暢
表裏威容顕曜超絶無量

未曾瞻覩殊妙如今

唯然大聖我心念言

今日世尊住奇特法

今日世雄住仏所住

今日世眼住導師行

今日世英住最勝道

今日天尊行如来徳

去来現仏仏相念得無今
仏念諸仏耶何故威神光光
乃爾

憬興師『述文贊』卷中

「今日世尊住奇特法、
W依神通輪所現之相。
非唯異常。亦无等者

『浄土三部経』（現代語訳版） 本願寺出版社

【三】 そのとき釈尊は喜びに満ちあふれ、お姿も清らかで、輝かしいお顔がひとときわ気高く見受けられた。

そこで阿難は釈尊のお心を受けて座から立ち、衣の右肩を脱いで地にひざまずき、うやうやしく合掌して釈尊にお尋ねした。

「世尊、今日は喜びに満ちあふれ、お姿も清らかで、そして輝かしいお顔がひとときわ気高く見受けられます。まるでくもりのない鏡に映る姿が透きとおっているかのようにすごいです。そして、その神々しいお姿がこの上なく超えすぐれて輝いておいでになります。」

わたしは今日までこのような尊いお姿を見ただけで、まことにすごいです。

そうです、世尊、わたしは思いますには、世尊は、今日、世の中でもっとも尊いものとして、特にすぐれた禅定に入っておいでになります。

また、煩惱を断ち悪魔を打ち負かす雄々しいものとして、仏のさとりの世界そのものに入っておいでになります。

また、迷いの世界を照らす智慧の眼として、人々を導く徳をそなえておいでになります。

また、世の中でもっとも秀でたものとして、何よりもすぐれた智慧の境地に入っておいでになります。

そしてまた、すべての世界でもっとも尊いものとして、如来の徳を行っておいでになります。

過去・現在・未来の仏がたは、互いに念じあわれるということですが、今、世尊もまた、仏がたを念じておいでになるに違いありません。そうでなければ、なぜ世尊のお姿がこのように神々しく輝いておいでになるのでしょうか」

「世尊は、今日、世の中でもっとも尊いものとして、とくにすぐれた禅定に入っておいでになります」とあるのは、仏の神通力によって現された姿であり、ただ普通と異なるというだけでなく、

故。R

今日世雄住佛所住、W
住普等三昧、能制衆魔
雄健天故。R

等しいものがないからである。

今日世眼住導師行、W
五眼名導師行。引導衆
生无過上故。R
今日世英住最勝道、W
佛住四智。獨秀无匹
故。R

〈迷いの世界を照らす智慧の眼として、人々を導く徳をそなえておいでになります〉とあるのは、五眼を導師の徳といい、人々を導くのに、これ以上のものはないからである。
〈世の中でもっとも秀でたものとして、何よりもすぐれた智慧の境地に入っておいになります〉とあるのは、仏は四智をそなえて、独り秀でておられ、等しいものがないからである。

今日天尊行如來徳、W
即第一義天。以佛性不
空義故。R

〈すべての世界でもっとも尊いものとして、如来の徳を行じておいでになります〉とあるのは、仏は第一義天であり、仏性は無量の徳をそなえ常住であることをさとしておられるからである。

阿難當知如來正覺、W
即奇特之法。R
慧見无尋、W述最勝之
道。R
无能過絶、W即如來之
徳。R」W已上R

〈阿難よ、よく知るがよい。如来のさとりは〉とあるのは、とくにすぐれた禪定について述べられたのである。
〈その智慧は、実に自在であり〉とあるのは、何よりもすぐれた智慧の境地について述べられたのである。
〈何ものにもさまたげられない〉とあるのは、如来の徳について述べられたのである」

『梵本和訳 無量寿経・阿弥陀経』藤田宏達57頁

そのとき、尊者アーナンダは座から立ち上がって、一方の肩に上衣をかけ、右の膝がしらを地につけ、世尊がおられるほうに向かって合掌をして、世尊に対してこう言った。

「おんみ世尊のもろもろの感官は澄みきり、皮膚の色は清浄で、顔の色は清らかであり、黄色く輝いております。あたかも、秋のなつめが、淡黄色で、清浄で、清らかであり、黄色く輝いているように、まさしく同じように、世尊のもろもろの感官は澄みきり、顔の色は清らかであり、黄色く輝いております。あたかも、世尊よジャンブー河産の金塊（閻浮檀金）が、熟練した鍛冶屋か鍛冶屋の息子によって、炉の中に投げ込まれて、よく精錬され、淡黄色の毛布の上に投げ置かれたとき、きわめて清浄で、清らかであり、黄色く輝いているように、まさしく同じように、世尊のもろもろの感官は澄みきり、顔の色は清浄で、皮膚の色は清らかであり、黄色く輝いております。しかし、世尊よ、わたくしは、いまよりはるか以前から、このように如来のもろもろの感官が澄みきり、このように顔の色が清浄で、皮膚の色が清らかであり、黄色く輝いているのを見たことがあります。それについて、世尊よ、わたくしはこのように思います、

《おお今日、如来は仏の境界に住しておられるのだ。
おお今日、如来は勝者の境界、

一切智者たることの境界、
偉大な象の境界に住しておられ、
過去・未来・現在の如来・応供・正等覺者たちのことを考え
ておられるのだ》と。」

如来問いを審らかにする 阿難の実答

於是世尊告阿難曰

そこで釈尊は阿難に対して仰せになった。

云何阿難諸天教汝來問仏
耶自以慧見問威顔乎

「阿難よ、天人がそなたにそのような質問をさせたのか、それ
ともそなた自身のすぐれた考えから尋ねたのか」

阿難白仏

阿難が答えている。

無有諸天來教我者自以所
見問斯義耳

「天人が来てわたしにそうさせたのではなく、まったく自分の
考えからこのことをお尋ねしたのでございます」

『教行信証』教文類に引用の『如来会』II・1011 と (現代語版) 本願寺出版社

阿難白佛言、

阿難が申しあげた。

世尊、我見如來光瑞希有
故發斯念。非因天等。

〈世尊、わたしは世尊のたぐいまれな輝かしいお姿を拝見し
て、このように思ったのです。決して神々に教えられてお尋ね
したわけではありません〉

『梵本和訳 無量寿經・阿弥陀經』藤田宏達58頁

このように語られたとき、世尊は尊者アーナンダに対してこう言われた。

「善いかな、善いかな、アーナンダよ、しかしながら、神々がそなたにこのこ
とを告げたのか。あるいは仏・世尊たちが「告げたの」か。それとも、自分自身
の審察の智によってこのように知ったのか。」

このように語られたとき、尊者アーナンダは世尊に対してこう言った。

「世尊よ、神々がこのことをわたくしに告げたものではありません。また仏・世
尊たちが「告げたの」でもありません。そうではなくて、世尊よ、わたくしは、
自分自身の審察の智だけによってこのように思ったのであります、〈今日、如来
は仏の境界に住しておられる。おお今日、如来は勝者の境界、一切智者たること
の境界、偉大な象の境界に住しておられ、過去・未来・現在の一切の仏・世尊た
ちのことを考えておられるのだ〉と。」

『六要鈔』(六、一〇一七) 義寂『大經義記卷上』を引用

不足に居して能く深義を問う。故に審問したまふ也。冥(表面にあらわれないさま)
に聖旨を承けて自ら斯の問を発す。更に諸天の我を教えて問わしむること無し。
義意かくの如し。煩わしく文を怙せず。(つけこまない)

如来が嘆じ許す

● 問つて「ろを嘆ずる

○①惠問を嘆ずる

仏言

善哉阿難所問甚快

発深智慧真妙弁才愍念衆生問斯

慧義

『浄土三部経』（現代語訳版）本願寺出版社

そこで釈尊は仰せになった。

「よろしい、阿難よ、そなたの問いはたいへん結構である。そなたは深い智慧と巧みな弁舌の力で、人々を哀れむ心からこのすぐれた質問をしたのである。」

『如来会』

佛告阿難、

善哉善哉、汝今快問。善能觀察

微妙辯才、能問如來如是之義。

釈尊は阿難に仰せになった。

「よろしい、そなたは今まことによい質問をした。如来のすぐれた弁舌の智慧をよく観察して、このことについて尋ねたのである。」

『梵本和訳 無量寿経・阿弥陀経』藤田宏達59頁

このように語られたとき、世尊は尊者アーナンダに対してこう言われた。

「善いかな、善いかな、アーナンダよ、実にそなたの発想は廣大であり、審察は賢善であり、弁才は巧みである。アーナンダよ、そなたが如来にこのことを尋ねなければならぬと考えたのは、多くの人々の福利のため、多くの人々の安楽のため、世間に対する憐愍のため、大衆の利益のため、神々と人間たちの福利のため安楽のために、そなたが行ったことなのである。」

○②仏出の値い難きことを挙げる

如来以無蓋大悲矜哀三界

所以出興於世

光闍道教

欲拯群萌惠以真実之利

如来はこの上ない慈悲の心で迷いの世界をお哀れみにな

る。世にお出ましになるわけは、

仏の教えを説き述べて

人々を救い、まことの利益を恵みたいとお考えになるからである。

無量億劫難値難見猶靈瑞華時時

乃出

このような仏のお出ましに会うことは、はかり知れない長い時を経てもなかなか難しいのであって、ちょうど優曇華の咲くことがきわめてまれであるようなものである。

無蓋 仏の慈悲が殊に勝れていて、上を蓋おおうことができないことをいう。無尽と同意。

三界 欲界色界無色界。凡夫が流転する迷いの世界。これを「世」としている。

光闍 広く開く。あきらかにする。『六要鈔』光は広。闍は暢。）

道教 言葉は「仏の説法」「正道教」とも取れるが、今は「方便教」「聖道教」を指す。

『如来会』

汝爲一切如来・應・正等
覺及安住大悲利益群生、
如優曇華希有大士出現世
間。
すべての仏がたは大いなる慈悲の心から人々を救うために世に
現れるのであり、それは優曇華が咲くほどきわめてまれなこと
である。今、わたしが仏としてこの世に現れた。

ここから『梵本和訳』は科段をまたがった文章なのでまとめて出します

『梵本和訳 無量寿経・阿弥陀経』藤田宏達 59頁

アーナンダよ、そのような次第で、無量・無数の如来・応供・正等覚者たちに対
して、「如来が」智見を分かち与えても、如来の智は損われることがない。それ
はなぜであるか。アーナンダよ、実に如来はさまたげられない智見をもっている
ことによるのである。アーナンダよ、如来は、もし望むならば、一施食をもつて、
一劫の間、住することができるであろう。あるいは百劫の間、あるいは千劫の間、
あるいは十万劫の間、あるいは十万・百万・千万劫の間にいたるまでも、あるい
はそれ以上にも「住することができるであろう」。しかも、如来のもろもろの感
官は毀損することがないであろうし、顔の色が変わることもないであろうし、ま
た皮膚の色が損われることもない。それはなぜであるか。アーナンダよ、このと
おり如来は三昧という面で極みに達しているからである。アーナンダよ、正等覚
者たちが世間に出現することは非常に得がたい。あたかも、もろもろのウドウン
バラの花（優曇華）の世間に出現することが非常に得がたいように、まさしく同
じように、「世間の人々の」利益を欲し、福利を求め、憐愍をもち、大悲を行う
如来たちの出現することは非常に得がたい。しかし、実に、聖なるアーナンダよ、
そなたが、へ一切切世間の師である衆生たち（諸仏）が世間に出現するよう
に」と、菩薩・大士たちの利益のために、如来にこのことを尋ねなければならぬ
と考えたのは、まさに如来の威力によるのである。

それでは、アーナンダよ、聞くがよい、よく、しっかりと思念せよ。わたくし
はそなたに説こう。」

「世尊よ、かしこまりました。」と、尊者アーナンダは世尊に答えた。

○③問ていゝるの益多きことを嘆ず

今所問者多所饒益開化一切諸天
人民
だから、今のそなたの問いは大きな利益をもたらすもの
で、すべての天人や人々をみな真実の道に入らせること
ができるのである。

『如来会』

故問斯義。又爲哀愍利樂諸有情
故、能問如来如是之義。
そこで、そなたはこのことを尋ねたのである。また、あ
らゆる人々を哀れんで、恵みと安らぎを与えるために、
このことについて尋ねたのである」

2 請問を対す

阿難当知

如来正覺其智難量多所導御

慧見無礙無能遏絶

阿難よ、知るがよい。如来のさとりは、はかり知れない尊い智慧をそなえ、人々を限りなく導くのである。その智慧は実に自在であり、何ものにもさまたげられない。

(以一餐之力能住寿命億百千劫
無数無量復過於此諸根悦予不以
毀損姿色不變光顏無異所以者何
如来定慧究暢無極於一切法而得
自在)

わずか一度の食事によって限らない寿命をおたもちになり、しかも喜びに満ちあふれ、お姿も清らかで、輝かしいお顔も気高く、少しもお変りにならない。なぜなら如来は禅定と智慧をどこまでもきわめ尽し、すべてを思いのままにする力を得ておいでになるからである。

(阿難諦聽今為汝說)

阿難よ、わたしはこれからそなたのために詳しく説くから、よく聴くがよい」

〔阿難樂聞〕

阿難はお答えた。

(対曰唯然願樂欲聞)

「はい、喜んで聞かせていただきます」

二 元祖義

Q 元祖の見る釈尊出世本懷は？

A 念仏往生を説くこと。

『漢語灯録』巻十、十四「浄土宗略要文」(『聖典全書』六卷232頁)

二に善導和尚意、釋尊出世の本意唯念佛往生を説く之文

『法事讃』云、「如來於五濁に出現して、隨宜の方便をもて群萌を化す。

或は多聞にして而得度すと説く。

或は小解をもつて三明を證すと説く。

或は福慧雙べて障を除くと教ふ。

或は禪念して坐して思量せよと教ふ。

種種法門皆解脱すれども、念佛の西方に往くに過ぎたるは無し。上み一形を盡し、十念・三念・五念に至るまで、佛來迎したまふ。直に彌陀弘誓の重きが爲に、凡夫をして念ずれば即ち生ぜ使むことを致す。」

(語句)

三明 もはや学ぶべきことが無い聖者、仏陀がもつ三種の明智(⑤ vidyā)。自他の過去世を明かし、見極める宿命明(宿住隨念智作証明、⑤ pūrvanivāsān usm·tjñānasāk·ātkriyā vidyā)、自他の未來を明かし、見通す天眼明(天眼智作証明、⑤ divyacak·urjñānasāk·ātkriyā vidyāまたは死生智作証明、⑤ cyutyupapādajñānasāk·ātkriyā vidyā)、煩惱を取り去る漏尽明(漏尽智作証明、⑤ āsarak·ayajñānasāk·ātkriyā vidyā)の三つをいう。緣起説と並んで樹下成道の内容ともされ、その関連から見れば、宿命明は現在のあるり方の原因である過去を見極める緣起説の流転分、天眼明はその原因を取り去ることによる未來を見極める緣起説の還滅分、漏尽明はそれら二つの見極めと表裏一体として起こる現在の煩惱の尽きた状態、成道を表す。また、これらの明は修行者がもつ超自然的な能力(神通力、⑤ abhijñā)と考えられて、神足通、他心通、天耳てんに通を加えて六神通とする。

福慧 福(布施持戒忍辱精進禪定)と慧(智慧) Ⅱ 六波羅蜜

禪念 禪定と智慧

と、念仏が他の行に勝れて、凡夫が往生浄土せしめられることが明かされている。

『三部經大意』正嘉本 觀經(『聖典全書』三卷110頁a)にも『法事讃』の偈が引用され、

釈尊出世の本懷、ただこのことにありといふべしとある。

Q その理由は？

A 「彌陀弘誓の重きが爲に」

Q 阿彌陀仏も念仏以外の行を説いているのではないか。

A 念仏は彌陀如來の本地の誓願。余行は本地のちかひにあらず。

念仏は釈尊随自の法、出世の本懐。余行は隨機の法。

『拾遺和語灯録』卷中 三、津戸三郎へつかはす御返事2 (『聖典全書』6巻645頁)

されば念佛往生の願は、これ弥陀如来の本地の誓願なり。余の種々の行は、本地のちかひにあらず。釈迦如来の種々の機縁にしたがひて、様々の行をとかせ給ひたる事にて候へば、釈迦も世にいで給ふ心は、弥陀の本願を「と」かんとおぼしめず御心にて候へども、衆生の機縁、人にしたがひてとき給ふ日は、余りの種々の行をもとき給ふは、これ隨機の法なり、佛の自らの御心のそこには候はず。されば念佛は弥陀にも利生の本願、釈迦にも出世の本懐也。

【参考】

「特留章」(末法万年の後に余行ことごとく滅し、特に念仏を留めたまふ文。)

(『聖典全書』一卷1281頁)

経道滅尽	聖道	十方	兜率	諸行	機縁浅薄
特留此經止住百歳	浄土	西方	西方	念仏	機縁深厚

機縁浅薄の理由

- ①教主釈尊の教化力が、時代を経るにつれて弱まる
- ②人間の修行力が低下する

機縁深厚の理由

- ①寿命無量の救済力は衰滅するときがない
- ②極悪最下の機のために成就された救済であるから人間の能力を問わない

問ひていはく、すでに「われ慈悲をもつて哀愍して、特にこの経を留めて止住すること百歳ならん」(大経・下)といふ。もししからば釈尊、慈悲をもつてしかも経教を留めたまはんに、いづれの経いづれの教か、しかも留まらざらんや。しかるをなんぞ余経を留めずして、ただこの経を留めたまふや。

答へていはく、たとひいづれの経を留むといへども、別して一経を指さば、またこの難を避らじ。ただ特にこの経を留むる、その深き意あるか。もし善導和尚の意によらば、この経のなかにすでに弥陀如来の念仏往生の本願(第十八願)を説けり。釈迦、慈悲をもつて念仏を留めんがために、殊にこの経を留めたまふ。余経のなかにはいまだ弥陀如来の念仏往生の本願を説かず。ゆゑに釈尊、慈悲をもつてこれを留めたまはず。おほよそ四十八願みな本願なりといへども、殊に念仏をもつて往生の規となす。

(中略)

ゆゑに知りぬ、四十八願のなかに、すでに念仏往生の願(第十八願)をもつて本願中の王となすといふことを。ここをもつて釈迦の慈悲、特にこの経をもつて止住すること百歳するなり。

Q 弥陀・釈迦二尊の関係如何。

A 発遣と招喚。

『無量寿経釈』（『聖典全書』六卷279頁）

一に大意とは、釈迦無勝浄土を捨てて、この穢土に出でたまふ事は、本と浄土の教を説きて衆生を勧進して、浄土に生ぜしめんが為なり。弥陀如来、穢土を捨てて、彼の浄土に出でたまふ事は、本と穢土の衆生を導きて、浄土に生ぜしめんがためなり。これ則ち諸仏の浄土に出で、穢土に出ます御本意なり。善導の『釈』（玄義分）に云はく。「釈迦は此の方より発遣す。」（云云）これ則ち此の『経』の大意なり。

三 宗祖義 『大經』が真実教である理由① 五徳瑞現

Q 宗祖は善導大師・法然聖人の出世本懐義を承けているか。
A はい。

『高僧和讃』善導讃Ⅱ・0440

(七〇)經道滅盡ときいたり 如來出世の本意なる

弘願眞宗にあひぬれば 凡夫念じてさとりなる

Q 釈尊出世の本懐(根本意趣)は？

A 弥陀の本願を説くため。(無量寿經の説法)

「正信偈」 如來所以興出世 唯説弥陀本願海

Q 弥陀の本願を説くことがなぜ本懐といえるか？

A 『無量寿經』発起序に於いて、これから説く教えが真実教であると示したから。

Q なぜ『無量寿經』が真実教と言えるのか？

A ①無量寿經説時に五徳瑞現があったこと。

②無量寿經の法義は真実の利であるから。

Q どこから見込むのか？

A 『教行信証』『教文類』全体がそうなっている。

【2】 それ真実の教を顕さば、すなはち『大無量寿經』これなり。この經の大意は、

弥陀、誓を超発して、広く法蔵を開きて、凡小を哀れんで選んで功德の宝を施すること致す。

釈迦、世に興して、道教を光闡して、群萌を拯ひ恵むに真実の利をもつてせんと欲すなり。

ここをもつて如來の本願を説きて經の宗旨とす、すなはち仏の名号をもつて經の体とするなり。

なにをもつてか出世の大事なりと知ることを得るとならば、

引文

『無量寿經』発起序 五徳瑞現の文 出世本懐の文

『如来会』 出世本懐の文

『平等覚經』 出世本懐の文

『無量寿經連義述文讃』 五徳瑞現の文

【7】 しかればすなはち、これ真実の教を顕す明証なり。

無量寿經が真実である明らかな証拠は五徳瑞現の文といわゆる出世本懐の文が根拠である。

Q 五徳瑞現の内容如何。

A

『大経』	梯實圓和上『教行信証の宗教構造』102頁	『如来会』(1、296)
今日世尊 住奇特法	入大寂定 (自利)	無明煩惱を寂滅し、生死の迷いを超えた涅槃の境地
今日世雄 住仏所住	あらゆる仏陀を覚者たらしめている涅槃の境地	完全に煩惱を克服し、勝った真の雄者であるすべての仏陀は、個我をはなれて普遍平等の真理を体得し、大涅槃の境地に安住されている。それゆえに仏陀は常に、過去、現在、未来の三世の一切の諸仏と全く同じ悟りの領域にあって互いに念じあっている。悟れるわけで、その三昧を普等三昧(普遍平等の真理を念ずる瞑想)という。いま真の雄者である世雄は、すべての仏陀達が安住されている普等三昧に住されているからこのようなすばらしい姿が現れているのである
今日世眼 住導師行		智慧の眼を開いて生死を超え、涅槃の境地にいたられた仏陀は、生死に迷う世間の人々をみちびいて涅槃にいたらしめる智慧の眼であるような偉大な導師である。いま釈尊は、まさにその導師としての徳に安住されている
今日世英 住最勝道		最高の智慧を完成された釈尊は、世間にある最も秀でたかたであるが、いまはその最も勝れた智慧の徳に安住されているから、いままで拝見したこともないすばらしいお姿が現れてきたのである
今日天尊 行如来徳	行如来徳 (利他)	一切は空であると悟りきわめた仏陀を第一義天と尊称するが、そのような第一義天であらせられる尊者は、自利と利他、智慧と慈悲をまどかにそなえた如来としての徳を、今まさに実践しようとされているのであろう

Q 「仏の所住」とはいかなる状況か。

A 『如来会』では「大寂定」といい、宗祖は「大涅槃」「無上涅槃」という。無住処涅槃のこと。

Q 大寂定とは？

A 「大経讃」五三首 大寂定の左訓(漢字交じりに変換)
(国宝本、顕智本)

静かに静かにましますこと。

殊に日頃に勝れましたまふゆへは、ただ阿弥陀の名号を説きたまはむとて世に出でましますこと。

殊に勝れめでたくまします御かたちなり。

Q 涅槃とは？

A ニルバーナ。滅度とも。煩惱が吹き消された状態。

(上座部)涅槃(灰身滅智) 身も心も滅して完全な無に帰する

自利。消極的。静的。

(大乘) 無住処涅槃

煩惱から解脱して安らかな境地に安住するだけではなく

社会全体を浄化して仏国土を建立し

一切の衆生を涅槃の境地にあらしめようとする

積極的。如来行の原動力。

Q 無住処とはどういうことか。

A 生死に住しない 一切は空であるときとる智慧の眼を開いて

煩惱の束縛から離れて、涅槃の境地に達する

涅槃に住しない つねに大悲心をおこして、衆生の苦悩を共感し、

苦を抜いて真実の樂を与えようとする

世親『攝大乘論釈』第十三(真諦訳) (T1595_31.0247b02)

四種涅槃「一本來清淨涅槃。二無住處涅槃。三有餘。四無餘。」と示した上で、

菩薩不見生死涅槃異。菩薩は生死と涅槃とを異と見ず。

由般若不住生死。般若に由て不住生死。

由慈悲不住涅槃。慈悲に由て不住涅槃。

若分別生死。則住生死。若し生死を分別せば則ち生死に住す。若し涅槃を分別せば則ち涅槃に住す。菩薩は無分別

菩薩得無分別智。無所分智を得て、分別する所無き故に所住無し。

別故無所住

別故無所住

別故無所住

Q 「如来の徳を行ず」とはどういう状況か。

A 如来の徳である無住処涅槃を原動力とし、生死に迷う者を導いて、自身と同じ涅槃の境地に入れしめる救済活動。慈悲。利他。

Q 大涅槃は釈尊にかぎるか？

A あらゆる仏陀を覚者たらしめている涅槃の境地、仏陀の本性。これを「大涅槃」「無上涅槃」といい、その境界を人格的に阿弥陀仏と説くのが『大経』である。

Q 阿弥陀仏と諸仏(釈尊)の関係如何。

A 諸仏は阿弥陀仏の世界から出て、そこへ結歸する。

(文証)『浄土和讃』八八首「諸経讃」

久遠実成阿弥陀仏 五濁の凡愚をあはれみて

釈迦牟尼仏としめしてぞ 迦耶城には応現する

(理証)華光出仏 浄土の蓮華の光が仏となってこの世に出現されたのが釈尊

釈尊は本地弥陀の本願をあらわすために出現された

Q 大涅槃であるような五徳が釈尊に現れるのはどういう時か。

A 「古来現仏仏相念」のとき光り輝く。

本源の阿弥陀仏の徳に融け込んで、阿弥陀仏と一体になっておられる時に。(融本応身)

(阿難 煩惱を抱えた声聞)

Q 阿難はどんな人か？

A ①常随の弟子。多聞第一。釈迦族とともに出家した。6人は阿羅漢に。阿難は煩惱を尽くすることができなかった。調達は何も得ることができなかった。

②ゴータミーの出家に尽力。しかしイケメンで煩惱を断っていない阿難に釈尊は「出家してきた女性を見たり語ったり親しんではならない」と忠告した。

③釈尊入滅にあたり、嘆き悲しんで「入滅後は誰によって悟りの道に入ることができるのですか」と尋ねた。釈尊は諸行無常を説いて自灯明法灯明を説いた。そして「阿難よ。ますます励んで道を修めよ。そうすれば、やがて汝は遠からず、煩惱から脱して、悟りを得るだろう。」と示した。双樹林下に涅槃に入られると、阿難は悲泣した。

Q 阿難はいつ阿羅漢になったか？

A 仏滅後、經典結集のメンバーに加わりうとする時、迦葉に五つの罪を告げられて懺悔した。その夜。大悟を得た。

(已上)『望月仏教大辞典』『阿難』、内藤昭文和上聞熏会レジューメ参照)

Q 煩惱を断つことができない阿難を相手に説かれたのが『大経』の説法ですね。

A 然りと雖、阿難は仏仏相念を見抜くことができた。

(阿難 凡人に非ず。還相の聖衆)

①五徳瑞現を見事に表現

②三世の諸仏が仏仏相念したまふことを知る

③その上でそのいわれを釋尊に問う

これらのことから阿難は

「浄土から来現し小乗の声聞の姿を取っている還相の菩薩である」と見なければならぬ。

Q 還相の菩薩であるという文証如何。

A 『大経』序分 証信序(『聖典全書』一卷16頁)

みな普賢大士の徳に遵ひて、諸の菩薩の無量の行願を具し、一切功德の法に安住す

Q 「みな」とはだれか？

A 阿難だけではなく、会座に連なっている一万二千人の声聞の比丘たち。

Q 普賢大士の徳とは？

A 従果還因の菩薩。第二十二願による。

(参考)

設我得仏 他方仏土 諸菩薩衆 來生我國 究竟必至 一生補処	除其本願 自在所化 為衆生故 被弘誓鎧 積累德本 度脱一切 遊諸仏國 修菩薩行 供養十方 諸仏如來 開化恒沙 無量衆生 使立無上 正真之道	超出常倫 諸地之行 現前修習 普賢之德	若不爾者 不取正覺
事 願	文当面 (一、二六) 本国位相 一生補処	論註 (一、五二八) 超出常倫	宗祖 (二、一三九) 必至補処還相回向 本国位相と他方撰 化全体が還相
除 他方撰化	除 他方撰化	除 他方撰化	除 他方撰化
常倫諸地の行を超 出し、現前に普賢 の徳を修習するを 除く	無上正真之道に立 せしめむをば除く	無上正真之道を立 せしめむをば除く	無上正真之道を立 せしめむをば除く
常倫諸地の行を超 出し、現前に普賢 の徳を修習せむ	常倫に超出し、諸 地の行現前し、普 賢の徳を修習せむ	常倫に超出し、諸 地の行現前し、普 賢の徳を修習せむ	常倫に超出し、諸 地の行現前し、普 賢の徳を修習せむ

Q 宗祖の「普賢の徳」の釈はあるか？

A 「讚弥陀偈和讃」(『聖典全書』二卷343頁)

(二七)

安樂无量の大菩薩

一生補處にいたるなり

普賢の徳に歸してこそ

機國にかならず化するなれ

「普賢の徳」の左訓 (漢字まじりに変換しました)

(文明本) 大慈大悲をもうすなり

(国宝本) 我等衆生極樂に参りなば大慈大悲をおこして十方にいたりて衆生を

利益するなり。仏の至極の慈悲を普賢とまふすなり

(顕智本) 我等衆生極樂に生まれなば大慈大悲をおこして十方にいたりて衆生

を利益するなり。仏の至極の慈悲を普賢とまふすなり

Q 証信序の所顕如何。

A 阿弥陀仏の浄土での法座が娑婆世界に映し出されている。

Q そんなことができるのか？

A 華光出仏。『大経』上 『聖典全書』一卷㊦頁

浄土の蓮華 三十六百千億の光 三十六百千億の諸仏

各各無量の衆生を仏の正道に安立せしめたまふ

四 宗祖義 『大經』が真実教である理由② 真実の利

Q 「②無量寿經の法義は真実の利であるから。」とどうしていえるのか。

A 無量寿經が真実であることをここに經典自身が語っているから真実經である。

Q 真実の利とは何か。

A 流通分において名号を聞くところに得られる「大利無上の功德」
(81頁)

「それかの仏の名号を聞くことを得て、歓喜踊躍して乃至一念せんことあらん。まさに知るべし、この人は大利を得とす。

すなはちこれ無上の功德を具足するなりと。

Q 無量寿經はどのようにして真実之利、無上功德を恵むのか。

A 本願の名号を説き与えることによって群萌をすくう經である。

光闡道教

Q いまいちど、出世本懐の文を読み。

A

如来以無蓋大悲矜哀三界
所以出興於世

如来、無蓋の大悲をもつて三界を矜哀したまふ。

光闡道教

世に出興するゆゑは、

道教を光闡して

欲拯群萌恵以真実之利

群萌を拯ひ、恵むに真実の利をもつてせんと欲してなり。

Q 「如来」とはどなたか。

A 諸仏。

『一念多念文意』(『聖典全書』二卷673頁) (『註釈版』689頁)

「如来」と申すは諸仏を申すなり。

Q 諸仏が迷いの世に出現する所以は？

A 「群萌を拯ひ、恵むに真実の利をもつてせん」がため。

Q 「道教を光闡して」も出世本懐に含まれるのではないか。

A 含まない。

御開山の釋に「光闡道教」の語が出世本懐から省かれている。

『尊号真像銘文』(『聖典全書』二卷650頁) (『註釈版』671頁)

「如来所以興出世」といふは、諸仏の世に出でたまふゆゑはと申すみのりなり。「唯說弥陀本願海」と申すは、諸仏の世に出でたまふ本懐は、ひとへに弥陀の願海一乗のみのりを説かんとなり。しかれば『大經』(上)には、「如来所以興出於世 欲拯群萌恵以真実之利」と説きたまへり。

「如来所以興出於世」は、

「如来」と申すは諸仏と申すなり、

「所以」といふはゆゑといふみことなり、

「興出於世」といふは世に仏出でたまふと申すみことなり。

「欲拯群萌」は、

「欲」といふはおぼしめすとなり、

「拯」はすくはんとなり、
「群萌」はよろづの衆生をすくはんとおぼしめすとなり。
仏の世に出でたまふゆゑは、弥陀の御ちかひを説きてよろづの衆生をたすけすくはんとおぼしめすとしるべし。

『一念多念証文』(689)

【18】 しかれば『大経』(上)には、「如来所以 興出於世 欲拯群萌 恵以真実之利」とのたまへり。この文のころは、

「如来」と申すは諸仏を申すなり。

「所以」はゆゑといふことばなり。

「興出於世」といふは、仏の世に出でたまふと申すなり。

「欲」はおぼしめすと申すなり。

「拯」はすくふといふ。

「群萌」はよろづの衆生といふ。

「恵」はめぐむと申す。

「真実之利」と申すは、弥陀の誓願を申すなり。

しかれば諸仏の世々に出でたまふゆゑは、弥陀の願力を説きて、よろづの衆生を恵み拯はんと欲しめすを、本懐とせんとしたまふがゆゑに、真実之利とは申すなり。しかればこれを諸仏出世の直説と申すなり。

Q 光闡道教とはどういう意味か。

A 光闡 広く開く。あきらかにする。

道教 言葉は「仏の説法」「正道教」とも取れるが、今は「方便教」「聖道教」を指し、光闡は釈迦一代の説法を指す。

『六要鈔』(『聖典全書』四卷102頁)

「光闡」等者、教法人を利するを名けて道教と爲、理を證して物を益するを以て眞實と爲。

「光」 廣也、

「闡」 暢也、

「恵」 施也 諸師意。

今依宗義言「道教」者、光^{ヒロク}指一代、益^{マス}亘五乘。

Q 道教が「方便教」「聖道教」を指すという理由如何。

A ①流通分に対応するが故に

②『大経』における語例がいずれも三乘法を指しているから

③「光闡道教」は「欲」の字の範囲外だから

①流通分の「経道」に対応するが故に

「光闡道教」

大利を失すとす (胎化79)

当来の世に経道滅尽せん

『無量寿経』以外の釈尊一代の説法

「欲拯群萌恵以真実之利」

大利を得とす

特にこの経を留めて止住すること百歳せん

『無量寿経』

②『大経』における語例がいずれも三乘法を指しているから

『大経』における「道教」の語例 いずれも三乘法をあらわしている。

上 証信序 八相化義

「諸の仏國に遊び普く道教を現ず」(9)

下 衆生往生果

「無量寿仏、もろもろの声聞・菩薩の大衆のために法を班宣したまふとき、すべてことごとく七宝の講堂に集会して、広く道教を宣べ妙法を演暢したまふに、「聞くもの」歓喜し、心に解り、道を得ざることなし。」(49)

下 釈迦指勸 弥勒領解

「いまわれこの世において仏となりて、経法を演説し、道教を宣布して、もろもろの疑網を断ち、愛欲の本を抜き、衆惡の源を杜ぐ。三界に遊歩するに拘碍するところなし。典攬の智慧は衆道の要なり。綱維を執持して昭然分明なり。五趣を開示して、いまだ度せざるものを度し、生死と泥洹の道を決正す。弥勒、まさに知るべし。なんぢ、無數劫よりこのかた菩薩の行を修して衆生を度せんと欲するに、それすでに久遠なり。」(90)

③「光闡道教」は「欲」(本意)の字の範囲外だから

所以出興於世

光闡道教

欲拯群萌恵以真実之利

Q では何のために諸仏は「光闡道教」するのか？
A 真実へ導く為。

『一念多念証文』(『聖典全書』二卷673頁)

おほよそ八万四千の法門は、みなこれ浄土の方便の善なり。これを要門といふ。これを仮門となづけたり。この要門・仮門といふは、すなはち『無量寿仏觀經』一部に説きたまへる定善・散善これなり。定善は十三觀なり、散善は三福九品の諸善なり。これみな浄土方便の要門なり、これを仮門ともいふ。この要門・仮門より、もろもろの衆生をすすめこしらへて、本願一乘円融無碍真実功德大宝海にしへすすめ入れたまふがゆゑに、よろづの自力の善業をば、方便の門と申すなり。

五 存覚上人『六要鈔』『決智抄』

存覚上人『六要鈔』（『聖典全書』四卷1023頁）

一約教權實

權 三乘
実 一乘 本懐

二約機利鈍

（般舟讚）

根性利者皆蒙益

岸上の者

（觀念法門）

鈍根无智難開悟 諸佛大悲於苦 溺水の人 釋迦出現、爲度五濁凡夫 平等悟入
大悲本懐、唯在濟度障重根鈍常沒衆生

問。今所引用、其要如何。

答。述爲出世大事之旨、成此『大經』爲眞實教。是其要也。

問。大事因縁文在『法花』。今『經』更无本懐之言、何成其義。

答。論其出世本懐之義、略有二意。

一約教權實。三乘是權、一乘是實。故以一乘說爲本懐。是『法花』意。

二約機利鈍。

『般舟讚』云、「根性利者皆蒙益、鈍根无智難開悟。」^{已上}

「玄義」（玄義分）云、「諸佛大悲於苦者、心偏愍念常沒衆生。是以勸歸淨土。

亦如溺水之人、急須偏救、岸上之者、何用濟爲。」^{已上}

『觀念法門』云、「釋迦出現、爲度五濁凡夫、卽以慈悲、開示十惡之因報果三途之苦、又以平等智恵、悟入人天廻生彌陀佛國。」^{已上}

大悲本懐、唯在濟度障重根鈍常沒衆生。而利根少、鈍根者多。故知諸教出離是少、淨土得脫其機是多。依此道理、所施利益、超過諸教。淨土教門豈非本懐。故『大經』（卷下）云、「如來智恵海、深廣无涯底。」^{已上}蓋此意也。慈悲深重救度惡機、故說爲深。利益廣大普被群機、故說爲廣。

存覚上人『決智抄』（『聖典全書』四卷674頁）

問ていはく、佛道を修行するは、生死をはなれんがためなり。しかるに方便の權教によりて出離をもとめば、その利をうべからず。眞實の教によりて眞實の佛果をばもとむべし。その眞實の教といふは、法華の一法なり。餘の一切の教は眞實にあらず。そのゆへは、かの『法華經』（卷一＊方便品）の文に、あるひは「十方佛土中、唯一乘法。無二亦无三。除佛方便説」といひ、あるひは「説佛智恵故、諸佛出於世。唯此一事實、餘二卽非眞」といひ、あるひは「雖示種々道、其實爲佛乘」といひ、あるひは「唯以一大事因縁故出現於世」とときて、一乘妙法のほかはことごとく眞實の教にあらず、みな方便の説なり。たゞこの一法のみ諸佛出世の本懐、衆生成佛の直道なりとあらはせり。あるひは三説に對して法華IV

10675の第一なることを嘆じ、あるひは十喻をときてまたこの『經』の最勝なることをのべ、あるひは穿鑿高原のたとへをもて法華を行ずる人の佛道にちかきことをしめし、あるひは王頂髻珠のたとへをかりて妙法の最上なることをあかせり。しかのみならず、五逆の調達、天王如來の記別にあづかり、八歳の龍女、無垢世界の成道をとなふ。これみな一代になきところ、諸教のをよばざるところなり。しかるにたまたま一乘流布の世に生まれながら、これを受持讀誦することなくして、ひとへに方便の教を執して念佛往生をねがはんこと、これおほきなるあやまりにあらずや。

こたへていはく、諸經のなかに『法華』のすぐれたることは、文にありてあきらかなり。これすなはち本迹二門の説相、爾前にこゑたるがゆへなり。迹門の正意は實相をあらはすにあり、本門の正意は如來の遠壽をあらはすにあり。しばらく迹門についていはず、實相といふは『經』(法華經)に「諸法實相」ととく。その「實相」といふは天台によるに、十界・十如・三千の性相、衆生の一念に居して不可思議なるをいふ。このゆへに佛と衆生と無別にして、煩惱と菩提と不二なり。これを「諸法從本來、常自寂滅相」(法華經卷*一方便品)ともいひ、「是法不可示、言辭相寂滅」IV-10676(法華經卷*一方便品)ともとけり。これすなはち衆生の佛性なり。佛、この理をあらはさんがために世にいでたまへば、出世の本懷ともいはれ、最第一の説ともなづくるなり。これ佛智なり、これ一乘なり、これ實相なり、これ寂滅なり。この一理のほかには、法としてさらにその體なし。かるがゆへに「二乗の法もなく三乗の法もなし」といひ、「餘はみな眞にあらざ」といふなり。敗種の二乗、成佛の芽莖を生ぜしも、このゆへなり。「一切衆生、佛道にいる」(法華經卷*一方便品意)といふも、このゆへなり。調達が作佛も、龍女が成佛も、みなこの佛智一乘の道によりてなり。しかるに淨土宗よりこれをみれば、うるところの益さまざまなれども、かれは二門のなかの聖道門、自力修入の道なり。されば迹門には、三周の聲聞、諸法實相の理をさととりて八相成道の記にあづかり、本門には、微塵の菩薩、佛壽長遠の説をきゝて増道損生の益をえたり。滅後下根の衆生は機分をよびがたきによりて、こゝにして法性の深理をさとりがたければ、佛願の強縁に託し彌陀の淨土に生じて、かしこにして無生のさとりをひらくべしとすゝむるなり。在世は大旨利根の機なるがゆへに、證をえ益にあづかること、ことはりなり。末世の凡夫は鈍根無智なるがゆへに、法は殊勝なれども淺機のためには不成の行なれば、なを生死をまぬかれがたし。IV-10677かゝる劣機のために出離の要道となるは、たゞ念佛の一行なり。このまへには、かの一代の諸經みな念佛の一門に歸して、これまた念佛一乘といはるゝなり。『觀經』の發起序のはじめに、諸經の時・佛・處・衆をつらねてこれをととき、善導和尚この文をもて「化前序」(序分義)と釋せらるゝは、このこゝろなり。あるひは「頓教一乘海」(玄義分)といひ、あるひは「頓教菩提藏」(般舟讚)と釋する、またこの義なり。詮ずるところ、一代に二門あるうちに、直至成佛、即身頓悟の道をあらはすにとりて、門々またあひわかれたり。たがひに眞假をあらそへども、まづ天台のこゝろをもていはず、『法華』をもて至極とす。四味の調熟をへて一圓の極理をあらはし、三乗の方便を開して一佛乘に會するがゆへな

り。このときは、一代みな『法華』に會するいはれあり。順次往生、凡夫出離の道をしめすは、念佛をもて最要とす。事理の觀行をすゝめず、たゞ稱名の易行をもちゐるがゆへなり。このときは、諸教みな念佛に歸する義あり。『般舟讚』に「説種々方便教門非一、但爲我等倒見凡夫。若能依教修行者、則門々見佛得生淨土」といへる、このことなり。しかれば、『法華』(卷六)も正宗當機の得益をはりて、流通「藥王品」に、時は後五百歳の時をさし、機は五障・三從の女人をいたして、「卽往安樂世IV-0678界阿彌陀佛所」ととく。これすなはち『法華』の利益も、滅後造惡の機のためには直至成佛の益も、つゝに往生淨土に歸入するすがたをあらはすなり。

(WEB版新纂淨土宗大辞典)

本門・迹門 『法華經』を前後半に分類する語。本迹二門、本地垂迹ともいわれる。『法華經』の前半一四品が迹門、後半一四品が本門。羅什門下の僧肇そうじょうが選述した『注維摩詰經』第一序註に「本に非ざれば以て跡を垂れることなく、跡に非ざれば以て本を顯すことなし。本跡殊なりと雖も而も不思議一なり」(正藏三八・三二七中)とあるような本迹説を、天台智顗が『法華經』の解釈として展開させたもの。『法華文句もんぐ』一上には「又一時分ちて二となす。序より安樂行に至る十四品は迹に約して開權顯実し、踊出より經を訖おわるまでの十四品は本に約して開權顯実す」(正藏三四・二上)とある。『法華經』の本門では、釈尊が久遠実成くおんじつじょうの本仏であることが明かされ、迹門では本仏が衆生を導くために迹あとを垂れ、釈尊としてこの世に現れて教えを説くすがたが示される。本迹二門は天台宗・日蓮宗において議論され、また淨土宗・淨土真宗では阿弥陀仏について本門の弥陀・迹門の弥陀が議論された。

六 『観経』と『弥陀経』

宗祖 「教文類 頌讚」

十方称讃之誠言 (小経)
時機純熟之真教 (観経)

宗祖 「化身土文類 観経」

● 観経隠頭『聖典全書 二巻 187頁(『註釈版 381頁

● 【17】 問ふ『大本(大経の三心と)観経の三心と』異かんぞや。

答ふ。釈家(善導)の意によりて『無量寿仏観経』を案ずれば、顕彰隠密の義あり。顕といふは、すなはち定散諸善を顕し、三輩・三心を開く。しかるに二善・三福は報土の真因にあらず。諸機の三心は自利各別にして、

P.・382

利他の一心にあらず。如来の異の方便、欣慕浄土の善根なり。これはこの経の意なり。すなはちこれ顕の義なり。彰といふは、如来の弘願を彰し、利他通入の一心を演暢す。達多(提婆達多)・闍世(阿闍世)の惡逆によりて、釈迦微笑の素懷を彰す。韋提別選の正意によりて、弥陀大悲の本願を開闡す。これすなはちこの経の隠彰の義なり。

● 観経隠頭『聖典全書 二巻 196頁(『註釈版 393頁

『観経』を説く必然性

機縁に応じて小乗・大乘、権教、実教を説く

しかし利根は甚だ少なく

鈍根は甚だ多い

韋提希の致請を縁として常没の凡愚に生死を超えさせるのが

『観経』要門

定 常没の凡愚に不可能

散 常没の凡愚に不可能

立相住心 有相の観も不可能

無相離念

立相住心もできない凡愚には

無相の観も不可能

【34】 宗師(善導)の意によるに、

「心によりて勝行を起せり。門八万四千に余れり。漸・頓すなはちおのおの所宜に称へり。縁に随ふものすなはちみな解脱を蒙る」(玄義分)といへり。

しかるに常没の凡愚、

定心修しがたし、息慮凝心のゆゑに。

散心行じがたし、廢惡修善のゆゑに。

ここをもつて立相住心なほ成じがたきがゆゑに、「たとひ千年の寿を尽すとも、法眼いまだかつて開けず」(定善義)といへり。

いかにいはんや無相離念まことに獲がたし。

ゆゑに、「如来はるかに末代罪濁の凡夫を知ろしめして、相を立て心を住すとも、なほ得ることあたはじと。いかにいはんや、相を離れて事を求めば、術通なき人の空に居て舍を立てんがごときなり」(同)といへり。

聖道↓要門↓弘願へ誘引結帰

「門余」といふは、「門」はすなはち八万四千の仮門なり、「余」はすなはち本願一乗海なり。

宗祖 「化身土文類 小経隠顕『聖典全書 二巻 199頁

『観経』に准知するに、この『経』（小経）にまた顕彰隠密の義あるべし。

顕といふは、経家は一切諸行の少善を嫌貶して、善本・徳本の真門を開示し、自利の一心を励まして難思の往生を勧む。ここをもつて『経』（同）には「多善根・多功德・多福德因縁」と説き、釈（法事讃・下）には「九品ともに回して不退を得よ」といへり。あるいは「無過念仏往西方三念五念仏来迎」（同・意）といへり。これはこれこの『経』（小経）の顕の義を示すなり。これすなはち真門のなかの方便なり。彰といふは、真実難信の法を彰す。これすなはち不可思議の願海を光闡して、無碍の大信心海に帰せしめ

P.・398

んと欲す。まことに勧めすで恒沙の勧めなれば、信もまた恒沙の信なり。ゆゑに甚難といへるなり。釈（法事讃・下）に、「ただちに弥陀の弘誓重なるをもつて、凡夫念ずればすなはち生ぜしむることを致す」といへり。これはこれ隠彰の義を開くなり。『経』（小経）に「執持」とのたまへり。また「一心」とのたまへり。「執」の言は心堅牢にして移転せざることを彰すなり。「持」の言は不散不失に名づくるなり。「一」の言は無二に名づくるの言なり。「心」の言は真実に名づくるなり。この『経』（小経）は大乗修多羅のなかの無問自説経なり。しかれば如来、世に興出したまふゆゑは、恒沙の諸仏の証護の正意、ただこれにあるなり。ここをもつて四依弘経の大士、三朝浄土の宗師、真宗念仏を開きて、濁世の邪偽を導く。三経の大綱、顕彰隠密の義ありといへども、信心を彰して能入とす。ゆゑに経のはじめに「如是」と称す。「如是」の義はすなはちよく信ずる相なり。いま三経を案ずるに、みなもつて金剛の真心を最要とせり。真心はすなはちこれ大信心なり。大信心は希有・最勝・真妙・清浄なり。なにをもつてのゆゑに、大信心海はすなはちもつて入りがたし、仏力より発起するがゆゑに。真実の楽邦はすなはちもつて往き易し、願力によりてすなはち生ずるがゆゑなり。

P.・399

『一念多念証文』（『聖典全書』二巻672頁）

「直為弥陀弘誓重」といふは、「直」はただしきなり、如来の直説といふなり。諸仏の世に出でたまふ本意と申すを直説といふなり。

良忠 鎮西第3祖『観経玄義分伝通記 第五（J02_0178B19）

〔常没重苦を攝す本意〕

今此の観経を説て大悲の本意を遂ること専ら凡夫を化するに在り。豈聖人の教と言ん乎

問 聖道門何ぞ苦者の為にせんや。

答 聖道亦常没の衆生を化す。俱に苦者なりと雖も而聖道の機は根利にして障輕し。淨土門の機は根鈍にして障重し。故に聖道之機をば大人志幹と云ひ、根性利者稱け、道悟三乗と名く。淨土之機をば怯弱下劣と云ひ、鈍根無智と稱け、福薄因疎と名く。諸文に顯著なり。混同すべからず。大悲の究極は殊に淨土に在り。教門多しと雖も、此を本意と爲。

問 若爾ば今經を以て如來出世本懷とすべきや。

答 大悲本意に約せば、亦た本懷と言んに何の相違が有ん。故に今の文に「諸佛大悲於苦者」等と云へり。

『阿彌陀經』云「釋迦牟尼佛能く娑婆國土五濁惡世に於て諸衆生の爲に此の難信之法を説く」と。元曉『彌陀經』を釋して云く「兩尊出世之大意四輩入道之要門なり。耳に經名を聞けば則ち一乗に入りて退すること無く、口に佛號を誦すれば則ち三界を出て還らず」と。『略記』に云く「然に信受を勸むることは願生を成ぜんが爲なり。是佛の本懷なり。輕爾すべからず。」已上

問 淨土の本懷は只是義道なり。未だ明證有らず。彼の法華を本懷と爲すが如き者は、文に在りて分明なり。經に云く「唯だ一大事因縁を以ての故に於世に出現す」已上。其の大事者一切皆成なり。鹿苑の誘引、方等の褒貶、般若の洮汰、衆道を示すと雖も、皆佛乘の爲なり。一代最頂は限て法華に在る故、本懷とするに足る。然に淨土經は薄福の一機を化せんが爲に、此の一教を説く。何ぞ本懷と爲ん。

答 今の釋の意趣其理灼然たり。證を於經の十句の出文に得たり。何ぞ證無しと云ん。理を於釋の七衆の溺水に驗る。那ぞ義推と挫かん。加之。釋尊悅豫微笑豈本意を遂る之相に非ん哉。諸佛の護念舒舌誰か小事を演る之儀と言ん乎。凡そ諸佛の出世は専ら利生の爲なり。利生の本意何ぞ重苦を傍とせん。故知す。出世の本意亦淨土教門に在ることを。彼の法華の如き本意と言ふと雖も、得悟の當機なり。今に準るに只是岸上之者なり。漸從り頓に入る故に調停區なり。今は直に頓に入る故に、經歷無し。況や彼の本懷は敗種難轉小機を化するに由る。今は彼に漏れたる常没重苦を攝す本意彌いよ足れり。

（参考）『法華経』

第一 方便品（T0262_09.0007a05;） 爾時世尊告舍利弗。	『大乘仏典』4 法華経Ⅰ 49頁（サンスクリット和訳 松濤誠廉・長尾雅人・丹治昭義訳） そこで世尊は尊者シャーリプトラが三たびにわたって説法を懇請する（勧請）のを知って、尊者シャーリプトラにこう言われた。 「いまや、シャーリプトラよ、お前は三たびまでも如来に懇請した。このように懇請しておるお前に、どうして私が説かないであろうか。だから、シャーリプトラよ、正しく聞きなさい。よく心のうちに思いなさい。私はお前に徳であろう」 世尊がこのことばを告げられるやいなや、そのとき、その集会のなかにいた、思いあがっている（増上慢）五千人の比丘・比丘尼、信男・信女が席を立て、世尊の両足を（自分の）頭にいただいて敬礼して、その集会から去っていった。なんとすれば、思いあがったものは（その）昔の善くない行為（不善根）のために、まだ得ていないものを得たと思い、まだ理解していないものを理解したと思っているからである。彼らは自分に欠陥のあることを知らないで、その集会から出ていった。世尊はまた、無言でそれを許されたのである。 そこで、世尊は尊者シャーリプトラに告げられた。シャーリプトラよ、私の集会は（不要の） もみから 粃殻が除かれ、無価値なものがいなくなつて、信仰の核心の上に立つものとなつた。シャーリプトラよ、彼ら高慢なものたちがここから去つたことは、よいことである。そこで、実に、この意味を私は説こう」 「どうぞ、お説きください、世尊よ」と、尊者シャーリプトラは世尊にお答えした。 世尊はこう言われた。―― いつか、あるときに、シャーリプトラよ、如来はこのような形の説法をするのである。それはたとえば、シャーリプトラよ、（きわめてまれにしか咲かない）ウドウンバラの花がいつか、あるときあらわれるが、ちょうどそのように、シャーリプトラよ、如来もまたいつか、あるとき、このような説法をするのである。私を信するがよい。シャーリプトラよ、私は事実を語るものであり、私はありのままに語るものであり、私は事実に反することなく語るものである。シャーリプトラよ、如来の深い意味を秘めたことばは知りたいものである。それはなぜかという、シャーリプトラよ、私は種々に解釈し、説明し、ことばとして語り、喩えを用いて、またいろいろな幾百・千
汝已慙懃三請。豈得不説。汝今諦聽。善思念之。吾當爲汝分別解說。 説此語時。會中有比丘比丘尼優婆塞優婆夷五千人等。即從座起禮佛而退。所以者何。此輩罪根深重及增上慢。未得謂得。未證謂證。有如此失。是以不住。世尊默然而不制止爾時佛告舍利弗。我今此衆無復枝葉。純有貞實。舍利弗。如是增上慢人。退亦佳矣。 汝今善聽。當爲汝説。舍利弗言。唯然世尊。願樂欲聞。	佛告舍利弗。 如是妙法。諸佛如來時乃説之。如優曇鉢華華時一現耳。舍利弗。汝等當信佛之所説言不虛妄。
舍利弗。諸佛隨宜説法意趣難解。所以者何。我以無數方便種種因緣譬喩言辭演説諸法。是法非思	

量分別之所能解。唯有諸佛乃能知之。

所以者何。諸佛世尊。唯以一大事因緣故出現於世。舍利弗。云何名諸佛世尊唯以一大事因緣故出現於世。諸佛世尊。欲令衆生開佛知見使得清淨故出現於世。欲示衆生佛之知見故出現於世。欲令衆生悟佛知見故出現於世。欲令衆生入佛知見道故出現於世。舍利弗。是爲諸佛以一大事因緣故出現於世。佛告舍利弗。諸佛如來。但教化菩薩。諸有所作常爲一事。唯以佛之知見示悟衆生。舍利弗。如來但以一佛乘故爲衆生說法。無有餘乘若二若三。

もの巧みな方便をもって法を明らかにしたからである。シャーリプトラよ、正しい法は思慮分別を超えたもので、思慮分別の及ばない範囲にあり、如來によって（のみ）理解されるものである。それはなぜかという点、シャーリプトラよ、**ただ一つの仕事のために、一つのなすべき事柄のために、正しいさとりを得た尊敬さるべき如來は世間にあらわれるからである。**すなわち、大きな仕事のために、大きななすべき事柄のために。シャーリプトラよ、如來には一つの仕事、一つのなすべきこと、すなわち大きな仕事、大きななすべきことがあって、その仕事のために正しいさとりを得た尊敬さるべき如來があらわれるというその仕事とは、どういうことであるか。すなわち、それは、如來の知見を衆生たちに得させるという目的で、そのために正しいさとりを得た尊敬さるべき如來は世間にあらわれるのである。如來の知見を衆生たちにさとらせるという目的で、正しいさとりを得た尊敬さるべき如來は世間にあらわれるのである。如來の知見の道に衆生たちをはいらせるといふ目的で、正しいさとりを得た尊敬さるべき如來は世間にあらわれるのである。これがすなわち、シャーリプトラよ、**如來の一つの仕事、一つのなすべき事柄、大きな仕事、大きななすべき事柄であり、（如來が）世間にあらわれるための唯一の目的なのである。**このようにして、実に、シャーリプトラよ、如來の唯一の仕事、唯一のなすべき事柄、大きな仕事、大きななすべき事柄というものが、それを如來は行なわれるのである。それはなぜかという点、シャーリプトラよ、私こそは如來の知見を得させるものであり、私こそは如來の知見を見させるものであり、私こそは如來の知見にはいらせるものであり、私こそは如來の知見をさとらせるものであり、私こそは如來の知見の道にはいらせるものだからである。私は、シャーリプトラよ、**ただ一つの乗り物（一乗）について、衆生たちに対して法を説く。**すなわち、それは、仏陀の乗り物（仏乗）を説くのであって、シャーリプトラよ、（そのほかに）何か**第二の乗り物、あるいは第三の乗り物**が存在するのではない。シャーリプトラよ、あらゆる十方の世界において、このことが法の本来のすがた（法性）なのである。

今經正直捨不融但説於今經は正直に不融を捨て、但だ融を説く。一座席をして同一道融。令一座席同一道味。味なら令む。乃ち如來出世の本懐を暢ぶ故なり。乃暢如來出世本懷故。

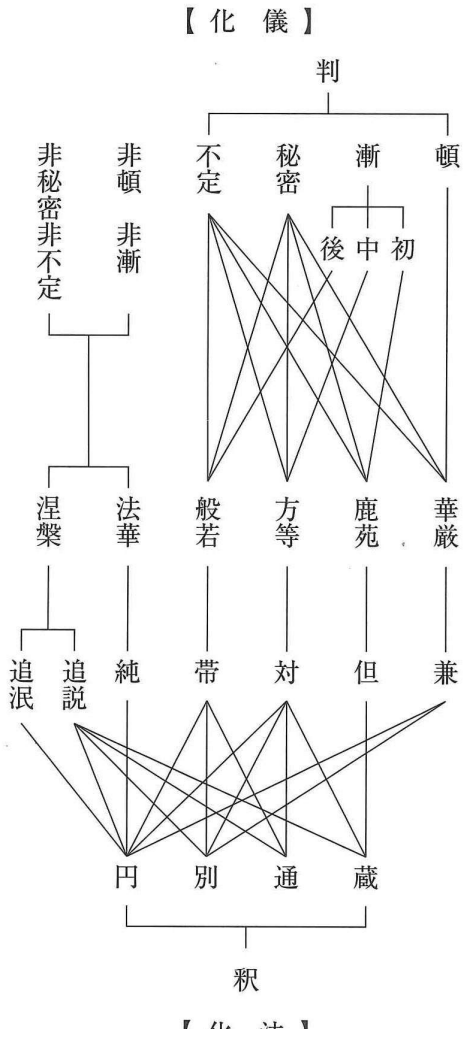
『同』卷二下 (T1716_33.0704b23)

法華總括衆經。而事極於法華は衆の經を總括して事此に極む。佛出世之本意なり。諸教此。佛出世之本意諸教法法之指歸なり。之指歸。

〔天台の教判(眞実教とは)〕

(『釈尊の教えとその展開—中国 日本篇』勸学寮編 153頁)

第一図 五時八教



藏教 声聞縁覚を教化することが中心。正化二乗 傍化菩薩
通教 大乘初門。菩薩を教化することが中心。正化菩薩 傍化二乗
別教 菩薩のみに説かれる純大乘。虚妄↓空↓仮↓中と一歩一歩仏道を歩む
円教 空仮中の三諦が円融相即であると一念の頓速に円具する。
本来仏に成るき身であること知り、方便であることを知て、迷情晴れて、
修行はそのまま続けられる。

修行はそのまま続けられる。

開会

第四般若時

法開会 般若皆空 般若の智慧によつて大乘小乗の偏執が破られる。

「唯一乗法無二亦無三一切法は大乘である」

第五法華涅槃時 機根が熟した声聞縁覚に方便をまじえず眞実 法華經をそのまま説いた。

人開会 三乗を開会して一乗を顕す。今まで説いてきたのは方便であつてこれから説くのが眞実であると宣言された。

会三帰一 三乗を開会して一乗に帰する。三乗それぞれに説いた法は全て仏乗である。

（参考）『華嚴經』

『大方廣佛華嚴經』卷第三十三 宝王如来性起品 (T0278_09.0612b26)

爾時普賢菩薩摩訶薩。告如来性起妙德菩薩等諸大衆言。佛子。如来應供等正覺性起正法不可思議。所以者何。非少因縁。成等正覺出興于世。佛子。以十種無量無數百千阿僧祇因縁。成等正覺出興于世。何等爲十。一者發無量菩提(3(sic))之心不捨一切衆生。二者過去無數劫修諸善根正直深心。三者無量慈悲救護衆生。四者行無量行不退大願。五者積無量功德心無厭足。六者恭敬供養無量諸佛教化衆生。七者出生無量方便智慧。八者成就無量諸功德藏。九者具足無量莊嚴智慧。十者分別演說無量諸法實義。佛子。如是等十種無量無數百千阿僧祇法門。成等正覺出興于世。

(読み下し 山上)	『如来性起品』(『大乘仏典』12 如来藏系經典 140 頁(チベット訳からの和訳 高崎直道訳))
爾の時普賢菩薩摩訶薩は如来性起妙徳を菩薩等諸大衆に告げて言く。	如来出現の十因
佛子。如来應供等正覺の性起は正法にして不可思議なり。	(七) 以上のように請われて、偉大なる普賢菩薩は、偉大なる如来性起妙徳菩薩に目礼してから、すべての菩薩衆に告げて言った。
所以者何。少き因縁をもって等正覺を成じ世に出興したまふに非ず。	ジナの子たちよ、すなわち、この、正しく完全なさとりをひらいた世の尊敬をうけるに値する如来の生起・出現の説示、無量の法をもってする生起・出現は、不可思議なことである。ジナの子たちよ、正しく完全なさとりをひらいた世の尊敬をうけるに値する如来たちの生起・出現は、一つの原因、一つで成立したものではない。それは何ゆえであるか。ジナの子たちよ、次のような十項にまとめられる、無量、無数、幾百千種のさまざまな徳性を身につける方法を完成したことが原因となつて、如来たちは(この世に)生起・出現されるのである。十種とは何々であるか。すなわち、
佛子。十種の無量無數百千阿僧祇の因縁を以て。等正覺を成じ世に出興したまふ。何等をか十とす。	(1) 前世において、すべての輪廻の道にあるものを守ろうとの心と、無量のさとりを求める心とを起すことを成し遂げたこと。
一者 發 無量菩提之心 不捨一切衆生。	(2) 前世に起こした願いや、深い宗教的志をよく浄め、成就すること。
二者 過去無數劫 修諸善根正直深心。	(3) 無量の慈しみ。あわれみをもって、衆生を救い守ることを成就すること。
三者 無量慈悲 救護衆生。	(4) 無量の修行と誓願を断絶なく相續して完成すること。
四者 行 無量行 大願を退せず。	

五者	積 無量功德 心に厭足無し。	(5) 福德と知恵という(さとりを得るための)資糧(の集積)を倦むことなく成就すること。
六者	恭敬 供養無量諸佛 教化衆生。	(6) 仏を供養し崇敬するはたらきと、衆生を成熟させるべき不断の流れとを成就すること。
七者	出生 無量方便智慧。	(7) (世を救う) 方便と、(真理を求める) 般若の(知恵の) 実践道を清浄にし、(慈しみ、あわれみ、喜び、一視同仁という四種の) 無量(心)を成就すること。
八者	成就 無量諸功德藏。	(8) 無量の種類の清浄な徳性を成就すること。
九者	具足 無量莊嚴智慧。	(9) (さとりへの) 道の諸要件を(身に) 飾りたてる無量の知を成就すること。
十者	分別演説 無量諸法實義。	(10) 有意義な無量の法を理解することによって、究め尽くすべきことを完成すること。
佛子。如是等十種無量無數百千阿僧祇法門。成等正覺出興于世。		以上であって、ジナの子たちよ、これら十項にまとめられる、無量・無数、幾百千種の徳性を身につける方法を完成したことが原因となって、如来たちは(この世に) 生起・出現されるのである。

〔華嚴の教判(眞実教とは)〕

①小乗教	声聞と縁覺のために説かれた法	二乗	
②大乘始教	二乗は成仏しない。五性格別	三乗	
③終教	いかなる衆生にも如来の本性が蔵されている	一乗	同教一乗 三乗教に同調した一乗
④頓教	②③は漸教 時間空間を超絶する 言説を用いない。		別教一乗 三乗教をはるかに別する 三乗教は一乗教より流出 三乗教は一乗教に帰入 別体無し。
⑤円教	事事無碍法界 事と理が相即無碍 さらに事と事が相即相入円融無碍		

以上。何かお気づきの点がありましたらお知らせ下さい。

〒五九九―八一三五

大阪府堺市東区西野521 旭照寺

山上正尊

senjakuhongan@gmail.com